

## 書評論文

### ナショナリズムと文化の多様性 —原聖『<民族起源>の精神史—ブルターニュとフランス近代—』 (岩波書店、2003年) をめぐって

安達 未菜\*

#### 1. 19世紀のナショナリズムについて

一般に19世紀はナショナリズムの時代であると言われる。フランスをはじめとして、一般にヨーロッパ各国では、特にフランス革命以降、ナショナリズムの台頭する時代に入る。フランス革命とナポレオン戦争以後、それまで封建的な国家・社会諸制度や強力な身分制度によって押さえつけられていた民衆のエネルギーが解放され、それと一緒に各地の民族的アイデンティティーを目覚めさせることとなった。労働者たちや農民たち、そしてブルジョワジーも含めて、民衆の大きな力には、それまでの封建的な枠組みとは異なる新しい国民国家という舞台が与えられ、そしてその国民国家という枠組みの中で凝集されなければならなかつた。その際、国民国家というその枠組みを維持し、強化してゆくものは、国民(ネイション)という自覚・意識であり、ある場合にはそれは民族という構成単位であった。

フランスでは大革命以後、これまでブルボン王家の「国王の臣民」であったものが、今や「フランス人」なるものが、人々の新たなるアイデンティティーとなつた。民衆は、国民軍の兵士として戦い、国家「ラ・マルセイエーズ」を歌い、統一フランス語を話す。19世紀は、国家としての政治的統一と文化的・心理的な单一アイデンティティー、すなわち单一の「ネイション」への統合が意図的に進められた時代であった。

E.J.ホブズボームによれば、ナショナリズムとは「政治的単位と民族的単位が一致すべきであるという原則」であり、その原則は、もっぱら近代的領域国家である「ネイション-ステイト」において追求された<sup>1</sup>。そしてホブズボームは、ゲルナーとともに、ナショナリズムが先在する諸文化を「ネイション」のうちに取り込み、新たな「ネイション」を創造し、そのプロセスにおいて先在する諸文化を抹殺しさえすると考える<sup>2</sup>。ナショナリズムが目標とする「ネイション-ステイト」の完成は、何らかの方法でなにがしかの同質的な文化的純化・統一化を目指す動きと不可分なのである（「ナショナリズム」の定義をめぐってはさまざまに複雑な議論が行われているが、「ネイション」自体の概念的定義は言うに及ばず、「ネイシ

\* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期

ヨン」と「国家」の関係についてのそれもまた簡単なものではない。この二つのものは単純に同じものではないし、しかしもちろんまったく別のものでもない。ここではさしあたって「国家」という装置的枠組みの中で「ネイション」の理念が追求される動き全体を、大まかではあるが「ナショナリズム」とする）。

アントニー・スミスは、「ネイション」の形成が、3つの革命によって進展したものであるとしている。第1のものは「分業の分野における革命」、第2のものは「行政管理における革命」、そして最後の第3のものが「文化的統一の革命」である<sup>3</sup>。第1の「分業の分野における革命」とは、一般に経済的なシステムの変革を指し、封建制から資本主義への移行を意味している。中心国家内に高い経済統合が形成され、そこから得られる収益が、国家の権力基盤を強化したのである。生産力の増大は人口と富の拡大につながった。第2の「行政管理における革命」とは、そのようにして拡大強化された国家経済を効率的に管理するシステムの発展を意味する。また軍事や行政における管理方法においても劇的に変化させ、ひいてはヨーロッパ各国の領土支配と政治支配を拡大させた。それに伴って、高等教育制度の発展、官僚制国家の出現、強力な軍隊などが実現したのであった。第3の「文化的統一の革命」は、官僚制の主権国家が伝統的な教会の権威と伝統に取って代わり、新たな知識階級が、国家や國家がコントロールする領域において文化的共同体の一一致・統一を確保する動きであった<sup>4</sup>。このように3つの革命は、中央集権的で文化的に同質な国家を築くことを軸として展開し、ヨーロッパと植民地の国家間システムのなかで、ナショナリズムが発生し、徐々に「ネイション」が形成されていったのである。

ところで、とりわけここで注目してゆきたいのは、ナショナリズムにおける3つ目の「文化・教育革命」の動きである。文化的標準化を目指そうとするこの動きは、領域的な中央集権化とまさしく同時に進行したのであった。そしてスミスは、こうした「文化標準化」と「言語」の関わりについて、次のように述べている。

「行政の言語は、標準的コミュニケーション様式を生み出すうえで、決定的役割を果たした。それは、現実のレベルでの国家規制によってのみならず、教養ある段階が行政の言語を通じて、みずからの統一生と同質性とを想起しうるように仕向けることによって、より巧妙に行われた。[.....]

言語の一一致を確保するというバレールとグレゴアール神父の試みも、重要であった。なぜなら彼らは、言語の一一致こそが、歴史的な連帯と歴史的な領土に基づく文化的同質性へと人々を駆り立て、そうすることによって、新しい国家の大衆的な市民意識のなかに内的亀裂の余地を残さない、と指摘したからである。」<sup>5</sup>

このように、言語政策は、ナショナリズムにおける文化的標準化・文化的統一化の戦略においてはきわめて重要な役割を果たすのである。ホブズボームによれば、近代化のプロセスは住民の同質化と標準化を含むものであり、とりわけ書き言葉としての「国語」の普及がそ

れを推し進めた。各国政府が膨大な数の市民を直接統治し、同時に国家の技術的・経済的発展を推し進めるためには、「国語」による言語的標準化が必要であった。国民に標準的な「国語」による読み書き能力を身につけさせるために、各国政府は初等・中等教育を大規模に普及させようとした。19世紀以降発展したナショナリズムの唱道者たちにとって「言語はネイションの魂であり [...] ますますナショナリティの決定的基準と見なされるようになった」のである<sup>6</sup>。

このような近代におけるナショナリズムの動き、つまり「国家」をその究極的な枠組みとして「ネイション」の統一化を図ろうとする強力な動きがあった一方で、この「国家」の内部において、今度はそれよりもより小さな地域である「地方」－こう言ってよければ「地方」という「小さなネイション」が、みずからのアイデンティティーを模索し主張しようとする動きも存在した。フランスでは、近代はもちろんのこと、近代的な「国家」という枠組みが明確な形をとって立ち上がってくる以前から、いくつかの地方においてそれを見いだすことができるが、原聖氏の著作『<民族起源>の精神史－ブルターニュとフランス近代－』(岩波書店、2003年)は、そのうちの代表的な地方である「ブルターニュ」を対象とした研究である。以下では、原氏のこの著作を取り上げながら、ナショナリズムと文化的多様性の関わりについて、そしてとりわけそこで言語が果たした役割などについて考えてゆきたい。

## 2. ブルターニュの民族的起源

ブルターニュはフランスの一地方でありながら、フランスとイギリスという大国にまたがる起源と歴史経緯を持ち、独自の王国・公国の形成も経験し、ヨーロッパそのものの歴史性の形成ともつながるスケールの大きさを持っている。原氏は、「2500年の歴史を持つケルト語、1000年間独立を保ったブルターニュ」であるという民族的自覚、「歴史意識の歴史」を探っていく。

『<民族起源>の精神史－ブルターニュとフランス近代－』(以下、「本書」と略記)の第1部(第1~2章)は、ブルターニュがひとつの文化的なまとまりを持った地域として確立する12世紀までの歩みが、歴史的事実をたどりながら検証される。その際「真実の歴史」として語られていた「トロイア伝説」の中の一つである「ブルートゥス伝説」というブリタニア起源の伝説と、それに接合した「コナン伝説」の形成の事情に焦点が当てられる。

まず第1章では、「コナン伝説」を生むきっかけを形成したネンニウスの『ブリトン人史』(9世紀)について考察される。そもそもブリトン人の起源をローマ共和政の祖、アイネイアスの孫ブルートゥスに求めるのは、このネンニウスから始まる。ネンニウスはブルートゥスからブリトン人へとつながる歴史的連関に関して、2つの説を挙げる。1つはブリトン人のトロイア起源伝説(トロイア戦争→アイネイアス→ブルートゥス→ブリトン人)、2つ目は、ブルートゥス・トロイア伝説を創世記伝説へと結びつけるもの(創世記神話の世界→アイネ

イアス→ブルートゥス→ブリトン人) であった。『ブリトン人史』では、ブルトン人がブリテン島から大陸へと移住したことなども記述されている<sup>7</sup>。

第2章では原氏は、ブリタニアとブルターニュの歴史的独自性を象徴する2つの伝説群について考察している。1つ目は、後にフランク王国に対抗してブルターニュの「レックス(王)」を名乗った英雄ノミノエの登場である。ノミノエは地域の領主をまとめ反乱を組織し独立を達成、皇帝の「ミッスス」(委任統治者)を自称し、その際9世紀半ば、ブルターニュの現ヴァンヌ周辺に「ブリタニア」という地名が使われるようになる。また、フランス語史ではフランス語の誕生を告げる文書とされている842年の「ストラスブルグの宣誓」にもノミノエの名前が見られるという<sup>8</sup>。

2つ目は「コナン伝説」である。この伝説は、10世紀『アルチュールの事績の書』ではじめて記述され、『ブリタニア列王史』では完全に移住伝説の中に組み込まれる。『ブリタニア列王史』は「ブルターニュ史」の基点であり、ブルターニュの歴史意識形成に大きな影響力を果たしたものである。ブルターニュという地域は、5世紀から7世紀頃にブリテン島からアルモリカへの移住により歴史的に形成され、9世紀ブリトン人の王が地方としてのブルターニュの支配を確立した。コナンはブリタニアからブルターニュへのブリトン人の「移住の英雄」として語り継がれ、後にブルターニュ公の権威が確立するなかで利用され、正統化されるのである<sup>9</sup>。

本書第2部(第3~5章)は、フランス王国形成期の13世紀から18世紀においてブルターニュがフランス文化圏に吸収される経緯がたどられる。さらにその後『ガリア戦記』が再発見され、トロイア起源説の歴史的意味が失われ、ブルターニュの民族的起源がギリシア・ローマ神話からガリアもしくはブリテン島へとシフトしてゆく様子が考察される。

まず第3章では、フランス王国とブルターニュの関わりが言語の視点から考察されている。1206年、史上初めてフランス国王がブルターニュ公を名乗り、13世紀末には宮廷で使われる言語はフランス語だけとなる。知識人形成が最初からパリなどフランス語圏で行われたことは、13世紀末以降の宮廷や教会でのフランス語の圧倒的な影響力を裏打ちする。この時代以降、歴史書もラテン語でなくフランス語で書かれ、その記述は公権力の権威付けにも利用された<sup>10</sup>。一方、この頃ブルターニュの起源には、トロイア起源を背景とする「ブルートゥス伝説」が「史実」として根強く残り、その上でブルターニュ成立に関わる「コナン伝説」もそこに重ねられるように大きく取り上げられていた。文化的フランス語圏の統合の中、政治的独立性を強めるブルターニュにとって、この2つの伝説が重要な意味を持った。実際、ブレイス語は「トロイアのいにしえの眞の言語」と表現されるようになっていた<sup>11</sup>。

第4章では、フランスにおいて王国の安定的形成と共に「ガリア・ケルト論」が議論されるようになった経緯が考察されてゆく。『ガリア戦記』などのガリアの歴史の再発見により、聖書から発する「歴史」つまり伝説に疑いの目が向けられることとなり、15世紀半ば以降のフランスでは、ガリアこそがフランスの起源であるという思想が築きあげられる。アンニウスの『古代史』(15世紀末)には、ギリシア語の「ガリア語起源説」に繋がる記述が見られ、

ガリア人の長い歴史起源と、ギリシアもローマもともにガリアから文化をもらい受けた、という主張がここから始まる。「絶対主義」の基盤が確立する16世紀、フランス語を王国の文書で排他的に使用しようとする「ヴィレール・コトレ法」が発布され、キリスト教的普遍主義の象徴であるラテン語使用の廃止によりフランスの国家的自律性、民族的一体性が宣言された。また自然のままの言語は不完全であり、人間の手が加わって完全なものとなるという「完全言語」の思想が生まれ、その生成にとっても起源神話が重要なものとされた<sup>12</sup>。16世紀、フランスではガリアの「発見」によりギリシアやブリテン島に対するガリア優越論、ガリア・ケルト起源論が展開され、フランス王国の独自性が歴史的に主張された。16世紀にはフランス王国の伸張に対してブルターニュの政治的独立が次第に失われていくのであるが、それに対してブルターニュではあくまでも精神的文化的に独立の意識を保ち続けるための「箔付け」として「トロイア伝説」が再認識され、民衆階級の中で普及し始める。ブルターニュこそ欧州で最古のガリア語を継承しているのだ、という主張がなされ、ガリア語=始源語=ケルト語=ブレイス語という「ケルトマニア」の思想へと直結していく<sup>13</sup>。

本書第5章では、17世紀以降のブルターニュの起源論について考察されている。1660年以降、ルイ14世の絶対主義的支配体制の強化によりブルターニュはますます衰退してゆく。これに対して、17世紀に書かれたブルターニュ史は、ブリトン人のガリア起源と古代ケルト人の言語発祥を説き「コナン伝説」を否定しブルターニュの創設者として「ノミノエ伝説」が論じられるようになった。言語系統論としての民族起源論ではヨーロッパ・スキタイ人起源論が新たに重視され始め、ケルト・ゲルマン同属論へと発展していく。18世紀ヨーロッパとりわけフランスでケルト語こそ人類始原の言語だと提唱する「ケルトマニア」が現れる。彼らによれば、ブルターニュの「ブルトン語/ブレイス語」こそが、そのガリア/ケルト語を正当に継承する言語なのである<sup>14</sup>。18世紀には「最初の人間アダムとイヴの話した言語がすでにブレイス語だった」と主張する研究まで現れた。過去を見る態度は、「ケルトマニア」のような大洪水以来の神話的世界の主張と、それを相手にしない実証的歴史家とに二極化する。また、キリスト教へのアンチテーゼとして、神秘主義運動、反合理主義精神を掲げる「ネオ・ドレイディズム」が復興し、19世紀に誕生する各種学術団体の先駆となる団体が組織されていく。「素朴な農民たち」の「太古からの伝承」に対するロマン主義的な民俗研究の視線も生まれ、19世紀の民族主義につながっていくのである<sup>15</sup>。

### 3. 近代におけるブルターニュ主義の展開

本書第3部以降（第6～7章および終章）では、19世紀以降ロマン主義のなかで民族起源は伝統歌謡にあるという考え方の登場と、それに伴う民族的アイデンティティー、言語復興活動について考察されている。また、人類学・言語学などにおける学問的形成過程での「ケルト」の位置付けについても考察されている。近代以降、ブルターニュを「太古の伝統の生き

る土地」の代名詞として伝統擁護による地域復興を唱える一方、観光開発に否定的な民族主義派も現れる。最後にケルト・ブームも踏まえ、起源論争の現代的意義が考察されている。

まず第6章では、言語ナショナリズムの基盤をなし、後のヨーロッパの民俗学を確立した民衆歌謡、さらにケルト語圏の民衆歌謡の収集家たちについて考察されている。18世紀初頭には、キリスト教流入以前の農村伝承の中に古代の「純粹な残存物」が在るとして、スコットランドを中心とした民衆歌謡の収集がなされるようになる。詩歌は「東方的」感性・ロマン主義に通じるものであり、この時代の「善き野蛮人」的オリエント・スタイルの高揚への反論として、ヨーロッパの「内なる野蛮人」志向に目が向けられる。伝承の贋作疑惑が持ち上がるが、歌こそが「文明化していない」民族のアイデンティティーを明かすものであり、そこに「民族の魂」が宿るという考えが根強く残り、民衆歌謡や詩歌の収集は、民族起源探索と民族的アイデンティティーの確認を目的にブルターニュにおける地方ナショナリズムの生成の原点をなすこととなる<sup>16</sup>。

19世紀、民衆歌謡の再評価の動きとともに学問としての民俗学が成立し、フランスにおいても「ケルト・アカデミー」が創設されるが、やはりそこにはブルターニュの知識人の関与が大きかった。このアカデミーは、ケルト人の歴史と、ヨーロッパの全ての言語の語源を明らかにすることを趣旨として設立され、考古学・民俗学の草創団体となるが、19世紀初頭ケルトマニア的思考が衰退することで民謡が古代の探求に繋がるという考え方は放棄されていく。民俗学は考古学と分離し、ロマン主義的文学と結びつきケルト的关心と交差していく<sup>17</sup>。しかし、ケルトマニア的思考は、依然として大衆レベルでは浸透していた。一方1830年代、フランス人の祖先として自覚されていたローマとフランクがフランスにとって好ましい存在ではなくなり、初等教育の整備が進むにつれて「われらフランス人の祖先ガリア人」という意識が広まっていった<sup>18</sup>。

一方で、「ブルターニュこそ純粹なケルト人、正統なるフランス人」という自負意識も高揚し、ブルターニュのナショナル・アイデンティティ形成に重要な役割を果たした「ブルターニュ協会」などの民間学術団体が設立されていく<sup>19</sup>。また「移住」によるブルターニュ文化の形成ということがブルターニュ民族主義を高めることになっていく。こうしてブルターニュの「特異性」というものが、フランスにおいても次第に社会的に認知され始め、ロマン主義的な「異国情緒」としてブルターニュの「ケルト」的色彩が強調されることになった。こうした動きは、19世紀後半にブルターニュの観光開発とも合致していく。

ヨーロッパでの民謡収集の広がりは、各地で民族主義の原点を構築し、具体的な「歴史的事件」を込めた語り歌こそ歴史的文書に匹敵するとされる中、ブルターニュにおいても、ラヴィルマルケの民謡集『バルザス・ブレイス』は歴史意識形成の役割を担い、この地方の言語ナショナリズム醸成へ大きく貢献した。さらにブレイス語擁護運動も盛んとなり、ドルイド信仰などの「ケルト」的連帯の必要性が主張されたのである<sup>20</sup>。

第7章は、民謡の体系化について考察されている。19世紀初め、交通の発達により、一般的な旅行が盛んになり始め、観光客誘致を目的としてそれぞれの地方において固有の民族衣装

が宣伝される一方で、そうした観光地化や祭りの変貌などもあって、民衆の伝統的生活習慣が失われるのではないかという危機感が高まり、そのことが民俗学研究を加速させる。しかし、産業化が進んでも、農村では「語り歌」が作られ続けるなど伝統文化が強固に残った<sup>21</sup>。考古学的発掘調査もあちこちで行われるようになり、学会組織や博物館のつながりの中で国家レベルでの学問的な体系化が始まる。学術用語が整備されガリアとケルトの区別もなされるようになる。しかし言語的自覚を強く持つブルターニュでは、反フランスを志向するようなケルト的連帯意識がますます強まっていく<sup>22</sup>。

終章では、現代のブルターニュの民族性を形作った思想と、活動及びその経緯について考察されている。19世紀末ブルターニュに中央の文化の流入が本格的に始まる。ブルターニュの民俗的イメージを駆り立て観光化を促進する為に「ケルト」が動員される。1889年頃、フランス語によるフランス語教育、直接方式の教育が徹底される中、ブレアイス語の擁護とカトリックの防衛として「ブレアイス語擁護委員会」が設立される。1898年「ブルターニュ地域主義連合」が結成されるが、民族主義的政治運動とならなかったのは、民衆レベルでの中世末期以来の大衆的イデオロギー、市場統合、フランス語化教育という「統合化先進地」であったからである。この団体の中で「ケルト的連帯」を語る知識人がケルト起源の独自性を主張しプロテスタントと協力関係を築く「ネオ・ドレイディズム」が成立する。さらにドライド運動の中心的役割を担った「ブルターニュ・バント団ゴルセズ」が結成され、民族としての独立を目指す分派も現れた。「ネオ・ドレイディズム」は、フォークロア的イメージと結びついており、ドライドの集会により「ケルト」をブルターニュ民衆に実感させたが、ゴルセズの儀礼がカトリックの聖職者の反感をかゝるゴルセズが定着することはなかった<sup>23</sup>。20世紀初頭、ケルト研究及びネオ・ドレイディズム的国際交流が最盛期を迎え、第1次大戦後、本格的な民族主義運動として『ブレアイズ・アタオ（永遠なるブルターニュ）』（1919年）が創刊される。芸術的革命運動家の間で広まったこの運動は、地域主義運動と分離独立運動の側面も備えており、「ブルターニュは民族」であり、民族固有の暮らしを取り戻し自決することを目標に、独立によってケルト的伝統を取り戻すという考えを持っていた。1940年ナチスに妥協的なヴィシー政権の協力組織として「ブルターニュ民族協議会」が設立され、ブルターニュ民族党も再結成され、人種主義的理論を振りかざし「ケルト人復興」が唱えられる。しかし、ナチスに協力したグループがいた為、第二次大戦後以降民族主義運動はタブー化することとなる<sup>24</sup>。民族主義的政治運動が下降する中、言語教育運動は盛り上がりを見せ、ブレアイス語教育運動だけが政治性を持って継続を許される。ケルト・ブームは、文化的レベルでの伝承性や倫理感を基点としたものとなり、フォークロア的な伝統衣装や伝統舞踊の祭りが、現代においてもブルターニュの文化的観光資源として重要な意義を担っている。こうしたフォークロアと言語に基づくアイデンティティーの自覚がブルターニュにおける民族性を表現していると言えるのである<sup>25</sup>。

#### 4. ナショナリズムと地方主義 ー プロヴァンスの場合

ここまででは、近代に国家的なナショナリズムの高揚が見られたフランスにおいて、その一地方であるブルターニュにおける言語復興活動と、それによるアイデンティティーの自覚という問題について論じた原聖氏の著作について見てきた。同様の問題は、実は、ただブルターニュにおいてのみ当てはまるものではなく、フランスの他の地方においてもまた見いだすことができるものである。以下では、原氏の著作にヒントを得ながら、南仏プロヴァンスの例を取り上げ、国家ナショナリズムと地方ナショナリズムの関係についてさらに考えてみたい。

ブルターニュと同様に、19世紀の南仏プロヴァンスにおいても、歴史的な伝統を基盤としてその上に地域文化のアイデンティティーを見いだし、それを主張してゆこうとする地域主義 (*Régionalisme*) の活発な動きが見られる。そしてその中心的な文化要素として活用されるのが、やはり「言語」であった。

そもそもアルルを中心としたプロヴァンス地方は、西ローマ帝国滅亡後に民族移動の波に洗われたことによりその言語的統一は失われ、8世紀頃から北フランス語「*Langue d'oil*」とかなり相違した南フランス語「*Langue d'oc*」が発生した。この南フランス語で書かれた文学こそがプロヴァンス文学である。中世期以降、プロヴァンス文学は吟遊詩人（トロバドゥール）の活躍により広がってゆく。異端アルビ派討伐十字軍の勃発とフランス王国による南仏の併合により、プロヴァンス文学は南フランス語と共に一時衰退するが、その後は国民文学復興の動きに連動して、後代まで脈々と受け継がれていった。近世以降、バロック詩人たちによって南仏文学が発揚され、それは18世紀半ばにはロマンス語学者や中世史家の歴史研究とともに発展する。ロマンス語学者は、中世の吟遊詩人の存在と価値を再発見し、長期間顧みられなかった詩人たちの作品の刊行と辞書の編纂に努め、一方中世史家は、中世南仏文学の衰退と消滅がアルビ派討伐十字軍に由来することを強調した。この主張が、南フランスの若い詩人たちに、その言語と文学に対する認識を深めさせ、文化的な自覚を促し、さらにロマン主義の波に乗って1854年に「南仏文学復興運動フェリブリージュ (*Félibrige*)」が創設されることとなる<sup>26</sup>。

この運動は、プロヴァンスの7人の詩人たちによって発足したのであるが、その基本方針は、すっかり俚語（パトワ）と化してしまったプロヴァンス語の綴字法を再確立し、文法を統一し、語彙を豊かにすること、そしてその新しいプロヴァンス語による創作を通してプロヴァンスの民族意識を顕揚することであった<sup>27</sup>。まさに、言語によるアイデンティティーの自覚・自信と地方文化の興隆を裏付ける動きであり、プロヴァンスにおいても、ブルターニュ同様に、地方文化保護のための「言語復興運動」という形が取られたことが分かる。このフェリブリージュにおいて最も重要な人物がフレデリック・ミストラルであった。ミストラルは、彼が21歳の時に、崇高なるプロヴァンス語の復興と、プロヴァンス語による詩的な流れと炎を高め、そのことによってプロヴァンスの種族的感情を再建することを自身の人生の目

標であると自覚したのであった<sup>28</sup>。当初、彼は地方分権主義的思想を抱いており、ブルターニュなどフランス各地の地方主義者や、カタロニアの北イタリアの連邦主義者と親密な関係を結んでおり、後にフェリブリージュの理事長に推举されている。実際、エクス法科大学を出た彼は、自分自身の心がプロヴァンス語の詩に取り憑かれていたために政治の世界にはまり込まずに済んだこと、そして詩がなければ、代議士となって生命を失っていたなどといふことを後に述べている<sup>29</sup>。ミストラルが、パリを中心とした中央集権的政治、国民国家としてのフランスの文化的統一への動きに反する考えを持っていたことが伺える。しかし、フェリブリージュの活動を続けるうちに、分離主義者として批難を受けたことで、次第にミストラルの政治色自体は薄らぎ、民族主義的アイデンティティーの復興のみを掲げるようになっていった<sup>30</sup>。彼は、傑作『ミレイユ (Mireio)』を筆頭に、叙事詩やプロヴァンス語辞典などを著した。この『ミレイユ』は、古い童話（『ジャンヌおばさん』）や、伝説（『黒い子羊』）など、プロヴァンス伝来の多くの挿話を結合しつつ、実在のプロヴァンスの風景、伝説、古い習慣、農民の生活などを彷彿とさせる作品となっている<sup>31</sup>。こうした作品が評価され、ミストラルは、1904年にノーベル文学賞を受賞し、そのことがプロヴァンスの言語・文化を、そして地方主義的文学運動として軽視されがちであったフェリブリージュを、第1級の文学運動として世間に認めさせ発展させる契機となったのである。1913年大統領レイモン・ポワンカレも「われわれフランスの歴史が誇るに足る1つの言語と文学の栄光を高めた」として感謝を述べており、このことからも、フランスの一地方文化としてではあるが、プロヴァンスの言語・文化の価値を、フランスが認めたことが伺える<sup>32</sup>。またミストラルは、自身「最大の叙事詩」と呼んだアルル民俗博物館（Muséon Arlaten）の建設などを行っている<sup>33</sup>。

現在では、法のもとでのラング・ドイルの徹底はなされておらず、地方文化に対する理解は深まっているが、プロヴァンス語の話者の減少と高齢化により、地域に根ざした言語の存続は、言語運動よりもむしろ観光誘致やお祭などに依拠していると思われる。このように、フランスのパリにおいて、大ナショナリズムが形成され、国家としての枠組みを確立する力が強かった一方で、地方文化を食い尽くすとした中央文化の力に対抗して生まれてきたのが、原聖氏が詳説するブルターニュの地方文化復興運動であり、またミストラルが推進したフェリブリージュとそれが目指す地方言語復興運動なのであった。

しかしプロヴァンスにおいて、フェリブリージュは非政治的なミストラルの立場と対立し、フランスからの分離主義を主張する分派が生まれていく。また、当初は多様な団体と交流を持っていたが、団体同士の対立も見られるようになる<sup>34</sup>。例えばフランス国内のガスコニューの地方文化団体との対立などである。中央集権的ナショナリズムに對抗するのと同じように、国内の地方文化運動同士が双方の地方ナショナリズムに對して対抗し合うという、言わば「ミニ・ナショナリズム」の対立の構図も出現してしまうのである。地域言語を主軸として、文化のアイデンティティーを打ち出そうとする限り、大国同士の国家的ナショナリズムの対立構造と同じような対立がどうしても発生してしまうのではないかと考えられる。

これまで見てきたように、原聖氏の地方文化についてのアプローチは、ブルターニュとい

う個別的な一地方文化だけに当てはまるものではなく、さらに他の地方文化の歴史やこれからのあり方について多くの示唆を与えてくれるものである。また国家的ナショナリズムとその構造についての多彩な分析の可能性も示してくれるものなのである。今後、そうした地点から出発して、さらに「言語」を中心とした文化運動が、相互対立に陥ることなく、多様で豊かな文化の連帶関係に入る可能性を模索すること、このことが私たちにとってますます重要なこととなるであろう。

### 参考文献

- E.J.ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』浜林ほか訳、大月書店、2001年。
- アントニー・スミス『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会、1999年。
- 原聖『<民族起源>の精神史—ブルターニュとフランス近代—』岩波書店、2003年。
- 杉富士雄による「解説」。フレデリック・ミストラル『プロヴァンスの少女ミレイユ』(岩波書店、1977年) 所収。
- 畠中敏郎「ミストラルとプロヴァンス語」大阪外国語大学学報、第1号、1952年。
- 福留邦浩「「フェリブリージュ」運動の形成とその理念—地域言語復興活動に内在する政治理念〈フェデラリズム〉をめぐってー」立命館国際研究、22-2、2009年10月。
- ミストラル『青春の思い出』杉富士夫訳、富岳書房、1989年。

---

### 注

1 E.J.ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』浜林ほか訳、大月書店、11頁。

2 同書、11-12頁。

3 アントニー・スミス『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会、1999年、155頁。

4 同書、157-158頁。

5 同書、158頁。

6 E.J.ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』120-123頁。

7 原聖『<民族起源>の精神史—ブルターニュとフランス近代—』岩波書店、2003年、25-31頁。

8 同書、35-37頁。

9 同書、37-47頁、54-55頁。

10 同書、60-64頁。

11 同書、67-72頁。

12 同書、80-81頁。

13 同書、84-87頁。

14 同書、97-100頁。

15 同書、113-120頁。

16 同書、127-132頁。

17 同書、138-143頁。

18 同書、148-149頁。

19 同書、151-153頁。

20 同書、160-172頁。

- 
- 21 同書、173-179 頁。
  - 22 同書、185-187 頁。
  - 23 同書、197-208 頁。
  - 24 同書、212-217 頁。
  - 25 同書、222-224 頁。
  - 26 杉富士雄による「解説」。フレデリック・ミストラル『プロヴァンスの少女ミレイユ』(岩波書店、1977 年)所収、304-306 頁。
  - 27 杉富士雄、同書、306 頁。畠中敏郎「ミストラルとプロヴァンス語」大阪外国語大学学報、第 1 号、1952 年、73-74 頁。
  - 28 畠中敏郎、前掲論文、75 頁。
  - 29 杉富士雄、前掲書、317 頁。
  - 30 福留邦浩「「フェリブリージュ」運動の形成とその理念—地域言語復興活動に内在する政治理念(フェデラリズム)をめぐってー」立命館国際研究、22-2、2009 年 10 月、252 頁。
  - 31 杉富士雄、前掲書、282 頁。
  - 32 同書、300 頁。
  - 33 同書、314 頁。
  - 34 ミストラル『青春の思い出』杉富士夫訳、富岳書房、1989 年、241-242 頁。